

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0572108041		
法人名	社会福祉法人 阿仁ふくし会		
事業所名	グループホーム 桂寿あに		
所在地	秋田県北秋田市阿仁水無字宮後4		
自己評価作成日	令和5年9月7日(木)	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kai gokensaku.jp/05/index.php
----------	-------------------------------------------------------------------------------------------------

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 秋田県社会福祉事業団		
所在地	秋田市御所野下堤五丁目1番地の1		
訪問調査日	令和5年10月13日(金)		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

お声掛けや健康状態の観察にて、認知症によりご自身の体調不良を訴えられない入居者でも、些細な異変に気づき早期対応できるように日頃から努めている。看護職員が不在である弱みをそのように補ってはいれるものの、やはり入居年数を重ねるに至り慢性疾患等が重症化するにつれ医療依存度が増していくことになるが、医師の意見や助言、ご家族の意向ならびに介護職員の抱える懸念、不安感などをすり合わせ、併設特養への移行も含め柔軟な対応ができるよう心掛けている。なお、将来的な事も踏まえて併設に特養がある当事業所のみに入居を申し込まれている方も中にはおります。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

平均年齢が93歳を超えるが、一日の中にDVDを観ながら体を動かしたりトランプで遊ぶ機会をつくったりしながら、心身機能の維持に努めている。ホームの裏山では季節ごとに旬の山菜が採れ、ホームの畑と家族の差し入れて新鮮な野菜が手に入る。入居者の皆さんに喜んでもらいたいとの思いから、地元で採れた食材をふんだんに食事に取り入れている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~46で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
47	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:19,20)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	54	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:8,9,15)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
48	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:14)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	55	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,16)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
49	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:19)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	56	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
50	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:30)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	57	職員は、生き活きと働けている (参考項目:10)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
51	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:41)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	58	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
52	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	59	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
53	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者と管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人の経営理念は毎朝の全体会議の最後に唱和しているため、職員にはかなり浸透している。事業所独自の理念もあり、その理念に基づいて日々の支援につなげている。	隣接する特別養護老人ホームにて、毎朝合同の申し送りが行われており、その機会に経営理念を唱和している。事業所独自の理念について、職員会議の際に意識づけしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	例年であれば年2回程度の地域交流会の開催をはじめ、法人主催の夕涼み会など年間を通して地域とのつながりを大切にしてきた経緯はあるものの、コロナ禍で状況が一変した。	地域とのつながりの重要性を認識しているが、コロナ禍に人材不足や過疎化が重なり思うような交流ができていない。家族も遠方に住んでいる方が多く、日常的な交流は難しくなっている。	
3		○事業所の力を活かした地域とのつながり 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に伝え、地域貢献している	生活習慣病や認知症等をテーマに法人主催の地域講演会を開催していたが、コロナ禍でここ3年は未実施。ことし北秋田市より認知症伴走型支援事業の取り組みを勧められたものの人員不足で断念した経緯もある。	/	/
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	行政、地域包括ならびに地域、有識者、家族の代表で構成された委員に施設長、管理者らで適切に開催されている。入居者の状況報告や提言助言等により問題の抱え込み解消や、より良いサービスにつなげている。	今年度は委員が集まり開催していたが、9月に予定していた会議は、北秋田管内の新型コロナウイルス感染症拡大を受けて書面による情報提供を行った。ヒヤリハットや事故等どんな内容でも報告し、委員の意見を取り入れ改善に取り組んでいる。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議の活用もさることながら、普段から入居者に係る各種申請や助成等についての担当との連絡、相談、報告ができており、風通しの良い風土作りに努めている。	メールや電話をはじめ、近くに阿仁庁舎があるため直接出向くこともあり、顔の見える関係性が築かれている。	
6	(5)	○身体拘束及び虐待をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」及び「高齢者虐待防止関連法」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組むとともに、虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	身体拘束ならびに高齢者虐待防止については、指針の整備と各委員会の設立及び定期的な委員会開催と全職員対象の研修会を年2回開催し、関連知識の周知徹底を図っている。特に当事業所は認知症症状が関連しないよう、認知症対応力の向上も図りながら不適切ケア排除に向けた取り組みと実践に心掛けている。	本年2月に虐待事案が確認され、行政機関等の指導を受けている。改善策として、認知症ケアの勉強会や損害保険会社による虐待防止及びリスクマネジメントの研修を定期的実施し、運営推進会議で報告し話し合う等、ホーム一体となって取り組んでいる。	運営推進会議を活用して外部の意見を取り入れたり、職員の声に耳を傾けたりしながら、研修等で得た知識と掛け合わせて、絶え間ない改善への取り組みに期待します。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	認知症高齢者の権利擁護について、成年後見制度等の必要性は十分理解できる反面、敷居が高い印象や費用面の問題など家族の理解も必須で活用までに至らず。尚、家族相談で弁護士相談会へ参加した経緯あり		
8		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居契約時に説明し、理解の上で同意書にサインいただき保管している。また、法令改定や施設サービス計画書の更新時等には家族連絡し、変更点の説明やご家族の希望や意向をふまえた取り組みをしている。		
9	(6)	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、要望、苦情等を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、適切に対応するとともに、それらを運営に反映させている	苦情解決処理規程の点検と見直しをし、苦情解決に係る円滑な運営及び対応に努めている。当事業所の苦情受付窓口や法人の苦情解決委員会等、その他機関を重要事項説明書に明記しご家族へ入居時に周知している。	遠方在住や、高齢の家族が多く、「とにかくよろしく願いたい」との意見をもらうとのこと。また、家族の相談事にも耳を傾ける機会が多く、運営に関する要望はほとんど見られない。	
10	(7)	○運営や処遇改善に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営や職場環境、職員育成等の処遇改善に関して、職員の意見や提案を聞く機会を設け、それらを適切に反映させている	事業所職員の会議は概ね2カ月に一度(コロナ前は毎月)開催し、入居者の状況把握のほか環境や備品整備についての議論や勉強会を行い、毎月行われている幹部会議に意見を吸い上げ意見反映、改善に努めている。	定期的に開催する職員会議において入居者の状態共有や研修等を行い、意見交換の場にもなっている。ホーム内で決定できないことは、管理者会議等上層部に相談の上対応している。夜間勤務者等の負担軽減を念頭に、洗濯乾燥機を電気式からしっかり乾くとされるガス式の製品に更新した。	
11		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、代表者自身や管理者や職員が同業者と交流する機会をつくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍で外部研修会への参加機会は激減したものの、現在は職員の代表がリモート研修へ参加し、その内容を職員全員が復命等を閲覧し、共有できるように努めている。		
12		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居時のアセスメントにより浮彫となった課題を解決できるよう支援しているものの、入居生活が長くなると新たな課題も出てくる。事業所内で解決できない場合もあるため、家族相談したり関係性を良好に保てるよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ほぼ上記同様で重度認知症入居者が多い状況であるがゆえ、ご家族の希望や意向を重視しており、都度家族連絡し確認するように努めている。		
14		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	介護者と入居者の関係性の一方で、子世代、孫世代の職員との馴染みある環境に、楽しみを持って生活できるよう時には手や知恵をお借りしながら支援しており、職員と入居者、入居者同士の関係性も良好と言える。		
15		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	13項とほぼ同じだが、コロナ禍で行事の縮小や面会の制限等で家族が介入する機会が激減した中でも、家族連絡を密にし関係性が良好に保てるよう努めている。毎月1回は機関紙を発行し、ご家族へ送付している。		
16	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように、支援に努めている	入居者が今まで培ってきた貴重な社会資源との関係性が途切れないよう、知人への電話や自宅を見に行くふるさと訪問も行っているが、コロナ禍や認知症悪化の影響で関係性を維持するのは難しい現状がある。	通院の帰りに入居者の自宅に寄り、郵便物の有無等を確認するふるさと訪問を行っている。コロナ禍のため、携帯電話によるビデオ通話を活用し、家族関係の維持に努めている。	
17		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者個人により、おひとりで過ごされるのを好む方や、馴染みの方と過ごされるなど様々ではあるものの、3度の食事や毎日の体操は入居者全員がそろい、ほか入浴機会なども協力しあう場面が見受けられている。		
18		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所した家族からの問い合わせに応じたり、併設特養へ入所した入居者家族との関係性は維持、開設30年目で当時の利用者家族が利用対象になってきており、当時のご縁を大切にしながら円滑な支援に努めている。		
19	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向、心身状態、有する力等の把握に努め、これが困難な場合は、本人本位に検討している	入居者それぞれ希望や意向があり、なるべく沿えるよう支援しているが認知症の影響や心身の状態悪化で入居生活が困難になるケースもあり、医師の助言や事業所の提案、家族の意向等をすり合わせた対応をしている。	末期がんを患った入居者について、これまでの状況と家族の思いを合わせて何度も意向確認をした。医師の意見も取り入れ、入院するに至ったケースを確認した。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、生きがい、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前の生活状況を職員間で共有しながら、以前の生活スタイルを活かすことができるよう支援している。		
21	(10)	○チームでつくる個別介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した個別介護計画を作成している	期間満了前には、職員会議等で話し合われた内容と居室担当者からの意見を踏まえながら本人やご家族の意向を確認し、必要時には主治医の助言も求めながら施設サービス計画書を作成している。	入居者との会話から思いを確認したり、居室担当職員と一緒に本人の思いを推測したりしている。家族とは電話を通じて意向を確認している。入居者の身体状況に応じて、かかりつけ医から意見を伺い計画作成に取り組んでいる。	
22		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や個別介護計画の見直しに活かしている	認知症状悪化や体調の不安定など日々変化する入居者の状況を把握する上で、毎日の申し送りや会議で提言があった内容を職員間で共有するよう努め、必要時には施設サービス計画書の内容も変更している。		
23		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍の影響で来訪者も皆無かつ、地域に赴くことも少なくなった。感染対策が問われる厳しい状況下においても、医療や介護の側面だけではなく外出や社会的交流などの重要性を意識しながら支援している。		
24	(11)	○かかりつけ医、かかりつけ歯科医、かかりつけ薬局等の利用支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医、かかりつけ歯科医、かかりつけ薬局等と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居者平均年齢が93歳と超高齢化であり医療との緊密な連携は不可欠である。協力医の阿仁診療所には定期受診や体調異変時にも早急に対応しているほか、より高度な医療を受ける場合など他医療機関への紹介等、本人及び家族説明も丁寧に行っている。	大館地区や鷹ノ巣地区等入居前からのかかりつけ医への通院支援を管理者中心に行っている。地元にかかりつけ薬局があり、内服薬の相談や処方薬の配達サービスを受けている。	
25		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職は不在だが異変時には受診または協力医の看護師へ連絡相談を基本とし判断に迷った時、特別な処置を必要とした際は特養看護の協力を得るも、本人の状態や介護員の情報に耳を傾け早期対応に心掛けている。		
26		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	当事業所は入院=退所なので(例外はある)、入院しないよう日々の健康管理が求められますが、入院する場合は診療情報提供書のほか、基本情報等入院する医療機関の必要とする情報を提供できるよう他医療機関と連絡調整しています。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	本人や家族が望む生活の実現、意向に沿ったケアが大切なことは十分理解しているが、特別な処置や緊急時の対応等、不安に思ったりすることがないように医療及び家族、介護者と十分な議論を重ねることが重要だと認識している。また、状況に応じて適切な看護サービスの活用も検討している。	ホームには看護職が不在のため、終末期等の場合は訪問看護の活用を想定しており、その旨を記載した指針を作成している。家族の心情は揺れ変化することを念頭に、何度も意向の確認をすることとしている。	
28		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の実践訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	事故発生防止のための指針や事故発生緊急時対応マニュアルの整備をし、関連知識の周知徹底を図るとともに、所轄消防署の協力を得てAEDを活用した救命救急の講習会を定期的を開催するなどしている。		
29	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	併設特養と合同で行う避難訓練や地域住民参加型の訓練(コロナ以前に実施)のほか、当事業所は入居者に対し有事の行動を染み込ませるよう毎月避難訓練を実施している。実際、7月15日豪雨の際は夕方に併設施設へ避難し一夜を過ごした経緯あり。	同法人が運営する特別養護老人ホームが隣接しており、避難訓練を毎月合同で実施している。近くに沢があり増水による影響を最小限にするため、消防署が土嚢を積んでくれたとのこと。最近は熊の出没が頻回となり、爆竹を鳴らすなどの対策を講じている。BCP(事業継続計画)は、現在作成中と説明がある。	
30	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	食事介助、入浴介助、排せつ介助に係る手順書の整備や認知症ケア対応の心得など、入居者の尊厳やプライバシーに配慮した内容の基礎知識を深めたり、不適切ケアがないよう定期的に自己チェックを実施している。	虐待の芽チェックリストを使い職員個々が定期的にケアの状況を確認し、管理者が集計している。集計結果を職員会議で共有し、不適切ケアになる前に気づきを促している。	
31		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	整容やつめ切、定期訪問の理美容と適切に実施できている。家族へ季節に応じた衣類を届けていただいたり、本人の好む衣類を購入したりし、本人が自由に選んで着こなせるよう配慮し、要望があれば染髪もしている。		
32	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	楽しみを持って食事することができるよう、旬の食材を活かした献立や行事食の提供に心掛けている。入居者には山菜の下ごしらえや果物の皮むき、食器拭きなど出来る範囲の手伝いを気軽に行っていたりしている。	食事提供のタイミングを入居者個々の食べる早さに応じて変えている。地産地消を心がけ裏山で採れた山菜を食卓に並べたり、季節を感じてもらえるよう家族から差し入れされる旬の野菜をふんだんに取り入れたりして食事を提供している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう状況を把握し、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	個々の嗜好や食べやすさ、摂取に要する時間等を考慮した上で食事提供し、食事水分摂取量の管理をしている。食事制限のある方など必要に応じて医師の助言を求めたり、月に1回の体重測定では増減の確認をしている。		
34		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアと義歯洗浄、定期的な義歯消毒を行っている。入居者個々の自立度で支援状況は異なるが、お声掛けや洗面所までの誘導ほか状況に応じた支援にて清潔保持に努めている。		
35	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	快適にトイレを済ませることができるよう、個々の能力に応じた支援と自尊心を傷つけない対応に心掛けている。夜間のポータブルトイレ設置や、頻尿者のトイレ真向かいの居室変更等、環境面にも配慮している。	入居者一人ひとりをよく観察することを基本としている。排泄パターンのズレや様子の変化から受診した結果、尿路感染症がわかったこともあり、早期治療に繋がった事例を確認した。	
36		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	多めの水分摂取や適度な運動に心掛け、毎日排便チェックし宿便者はほほばない。以前まで薬剤の依存度が強い状況にあったが、受診等で医師へ状態報告しながら段階的に薬剤を減らすなどの対応をしている。		
37	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングや健康状態に合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	週2回の入浴機会を確保し、曜日や時間帯の固定はないものの、診療状況や行事等で午前午後の時間帯配分と入居者の振り分けをして事前計画している。人員の関係で決して本人本位で入浴はできないが、体調不良時や診療が重なる場合でも別の日にゆっくり入られるよう柔軟に対応している。	平均年齢が93歳を超え、通院支援が増えたことにより、その予定との兼ね合いで入浴機会を確保している。浴室内では、入浴用の椅子や手すりを使いながら一人ひとりのペースを尊重している。	
38		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	その日の体調や状況に応じて本人本位で過ごされているが、基本的に夜間はゆっくり休んでいただけるように(特に強い認知症症状のある方は)、必要以上休まれないよう見守りやお声掛けをしている。		
39		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解に努めており、医療関係者の活用や服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	全入居者の内服を管理、かかりつけ医や効能等一覧表あり。服薬時には手渡しも含め介助、複数人確認し投薬前には呼名する等誤薬防止に努めている。新薬や変更時には薬剤師から注意点等の説明を受けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	認知症の進行により、ここでの生活を理解できない入居者も半数ほど占める状況で、全員が生活歴や能力からの役割等を見出すのが難しい中にも、日々の入居生活に楽しみが持てるよう支援している。		
41	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍の影響もあり、家族と会うことや地域に赴く機会も激減した中でも、小集団での季節に応じた行事、外食等を企画し楽しんでもらっている。また、通院の帰りに自宅へ立ち寄り、家族同伴の受診後に家族と食事をする機会を設けたり、可能な限りの支援をしている。	天気の良い日には、ドライブ、外食、道の駅散策等を企画し実施している。面会の申し出があれば、隣接する特別養護老人ホームの一室を準備したり、ホームの窓越しに顔を合わせる機会を設けたりしている。	
42		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	基本、金銭は事業所管理だが、一部小遣い程度所持している方もいる。希望があれば、いつでもつかえるように対応しているが、いざ買い物にしても金銭価値にズレがあり、買い物も支援しなければならない状況である。		
43	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、臭い、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	毎日の清掃と空調管理、定時換気顺心掛けて、ホールは季節に応じたシンプルな装飾を施している。見当識障害の方が多いため、各入り口には表札を設け、特に共用トイレに不快感を示さないよう、清掃や消毒を適宜実施している。	季節毎の演出として、装飾を入居者と職員と一緒に作成し飾り付けている。居間兼食堂にある大きな掃き出し窓には、障子が設置されているため光の調整が可能となっている。食事準備が進むと煮炊きする匂いがして、家庭的な雰囲気を感じさせる。	
44		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食事席は固定で入居者同士の関係性を考慮した配置にしており、ソファースペースは基本自由だが、自然と気の合った同士で過ごされていることが多い。		
45	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	慣れ親しんだ家具を持ち込んで使ったり、衣類や寝具をお使いいただいている方が大半だが、家族の写真を見て思いを馳せる方もいれば、全く関心すら示さない方など様々である。	各居室にはベッド、洋服タンス、家族写真等が設えてある。認知症の状況に応じて混乱や不安を招かないよう、室内の配置等に配慮がある。	
46		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	事業所内は段差もなく、手すりが設置され安全面に配慮されているものの、いざ屋外に行くとなれば階段と急勾配がある等、かなりの温度差が感じられる。事業所内だけの自立に留まらず、社会的な自立も求められる。		